

覇権国家「ロシア」について再び考える

——前号小論に続けて——

エッセイスト 近藤 節夫（会員）

一、情報非公開のロシア

本誌前号（二九〇号）で「覇権国家『ロシア』の本質と民族性」と題して、冬のシベリア鉄道から見聞し、感じた現代ロシアの異質な現状について寄稿した。早速かの国に精通している幾人かの友人からいろいろ示唆に富んだ卓見や、アドバイスと批判を織り込んだ辛口の意見も寄せられた。

そのほとんどは、拙稿の内容は概ね正しいと思うが、ロシアに対して少々厳し過ぎやしなやか、もう少しロシアに花を持たせて長所と短所を併記した方が良かったのではないかと、多少首肯出来る指摘や提言だった。ロシアについて批判的に過ぎるとの指摘に関しては、冒頭から偏見に陥らないように留意はしていたが、敢えてロシアの情報非公開に対する批判を念頭に起稿したので、そのように受け取られたのではないかと理解している。

一般的に日本人は、相手を直接非難したり、欠点をあからさまに指摘することを遠慮する傾向が強い。それが、例え真実であっても見て見ぬ振りをしたり、直截に物を言うことを避けることによって、周囲に波風を立てず、ことを荒立てずに囲りと円満に協調していくことを心がけてきた。わが国の外交スタンスにも、その引込み思案で、優柔不断の姿勢が反映され、国際政治の舞台においてその存在感に影を落としていることは紛れもない。その結果は、物言わぬ静かな国として、うわべは紳士国として扱われながら、陰では交渉相手としては嘗められ、頼りにならない国としていい子にさせられ、重大事項決定の場においてはいつも「つんば敷敷」に置かれてきたのである。しかし、果たしていつまでもこのように相手を過度に配慮した対応を続けていてよいものだろうか。二国間の外交交渉においては、いかに相手が大国・強国であろうと、相手に敬意を払いながらも正しいことは率直に筋を通して伝える方が、反って相互の信頼関係構築のためにも、また実利的な面でもむしろ長い目で運ばプラスに作用するのではないか。あらゆる面でもっと自己主張した方が、有利にことが運ぶように思う。ロシアに関する拙稿もそういう趣旨で書かれたことを、あらかじめお断りしておきたい。

さて、拙稿は若干の例外を別にすれば、もとより意図的にロシアの長所を取り上げなかったわけではない。ロシアの現状と平素の市民生活についてわが国では意外に知られていないことが多く、それが日ロ両国民を相互不信に陥らせ、お互いを不幸な状態に置いている。筆者は、日常生活において少しでも市民の身近に起こっている現実をありのままに知ってもらいたいと考え、シベリア鉄道という小さなチャンネルを通して、その旅の僅かな体験を思い

起こしながら、ロシアの実情について感じたままを書いたまでのことである。

現代ロシア社会には率直に言って、相変わらず多くの機密性・不誠実性・意外性・非民主性・利己主義・独善的・強権的・言論封殺的・残虐性、等のイメージ的に負のファクターが多重的に渦巻いているように思える。それゆえに敢えて、あまたある問題点や疑念を、筆者の知る限り紹介したいとの思いで事実を書き綴った結果が、見方によってはロシアの欠点ばかりが目立ち、多少作爲的な内容だと誤解される点があったかも知れない。だが、今日のロシアは、相変わらず旧ソ連時代の秘密警察（KGB）のDNAを引き継いで、国家にとって都合の悪いことはすべて隠蔽しようとする、秘密主義的な傾向が依然として根強く、僭越ではあるが、筆者はその点に警鐘を鳴らしたつもりであり、少しでもロシア官製の色眼鏡ではなく、自分の目で事実をしっかりと見詰め、真実を汲み取って欲しいと願っている。

もう一点敢えて強調しておきたいことは、ロシア社会の内部にはこの本質や、真実があまりのままに伝わらない「檻」のような、目に見えないフレームが形成されていて、普通の庶民はその「檻」に閉じ込められた「籠の中の鳥」と呼んでもよく、民主的な制度、組織や行動が存在し得ない社会になっている。この「ぬえ」のような社会こそが問題であり、変にロシアの体制やそのやり方を好意的に慮ろうとしたり、うやむやにロシアの非民主的な現状をそのまま受け入れて真実から目を背けることは、ロシアの民主化発展のために何の役にも立たない。相手の言いなりになってきた、過去の日ロ両国間の外交交渉の経緯を振り返ってみても、わが国の「事なかれ主義」の対応が、決して賢明ではなかったことは言わずもがなである。その点で筆者は、事実が事実として、常識的に考えて不条理なことは不条理として、情報公開すべき事柄は、はっきり口に出して言うべきであると考えている。そのためには多くの体験事例を示し、その賢明な判断を大勢の人に委ねることが妥当である。

二、ロシアの強権！ もう北方領土は還らない？

今夏お盆休みの間に不意にロシアに関して電撃的に、気になるニュースが連続して飛び込んできた。

そのひとつ①は、八月一日、ロシア政府が北方領土問題の決着を図るべく、いよいよ具体的な行動計画を公式に発表したことである。すでにロシア政府は八月三日クリル（千島）発展計画を発表し、二〇一五年までに旧千島列島地域に約八〇〇億円を投資して、各種インフラ整備や、現在の一・五倍の人口増加を計画していることを明らかにしていたが、ここに至ってわが国にとって関係の深い、北方領土開発計画の具体的な行動プランとスケジュールを発表したのである。

もうひとつの衝撃的ニュース②は、八月一六日未明、北方四島周辺海域でロシア国境警備艇が日本漁船を銃撃し、船員一名を死亡させ、漁船を他の三名の乗組員とともに拿捕したと日本国中を震撼させた事件である。

豪腕ロシアがいよいよ法衣の下の刀をちらつかせ、牙を剥き出したのである。

①ロシア政府、北方領土にインフラ投資

「ロシア政府が、地域振興策の一環として、八月一日国後、択捉両島の空港整備計画を明らかにした。・・・その他にも四つの港と道路も整備すると公表した。ロシア本土との経済的結びつきを強化して、日本からの領土返還要求に対抗する狙いがあると見られている」(一八年八月一二日付朝日)。

これまで首都モスクワからシベリア以遠の遠隔地は、財政的な理由からインフラ整備に手をつけずにいたが、最近になって好調なロシア経済を背景に一気にインフラ整備と、外交問題にもロシア流の決着をつけようとの思惑を露わにしてきた。ロシア政府はこれまで最果ての北方四島にほとんど投資せず、島民を半ば棄民扱いしていたにも拘わらず、現地住民の間に芽生えた日本の援助に期待する日本臍肩の空気を、この際石油で潤った資金で一掃しようとおもむろに行動を起こしたのである。過去の北方四島返還交渉の経緯を見るまでもなく、このニュース一件だけ取り上げても、ロシアは日本側が望むような北方領土四島返還なんて、露ほども考えていなかったことは明らかであろう。

かつて鈴木宗男代議士が個人プレイで画策したような「北方領土二島返還」はおろか、両国を代表する橋本・エルツィン会談のクラスノヤルスク共同宣言の内容もぶっ飛ばすような、北方四島問題について好機到来を待つて領土占有権を宣言しようと手ぐすねをひき、自己中心的に不誠実な行動を開始しようとしているのが、現在の強権プーチン政権なのである。覇権国家ロシアとしては、当初より北方領土を第二次大戦戦勝国戦利品のひとつとして考えていた節もあり、今後日本がよほどドラスチックなどん返しても起こささない限り、日本の北方四島はロシアに占領され実行支配されたまま、近い将来日本に返還されることはほとんど望み薄と考えざるを得ない。どう足掻こうともこれが、歴史的に行き詰った日ロ両国間の日本側に課せられた負の外交遺産であり、その忌まわしい結末なのである。

②北方四島海域の日本漁船拿捕で死者

現段階では日本漁船拿捕の経緯と真相は詳らかではなく軽々に断定は出来ないが、相手が生きたかな覇権国家ロシアだけに真実がフェアに解明されることはあまり期待出来ない。しかし、いかに許可を得ていなかったとは言え、深夜国境周辺で操業する無防備の(明らかに日本船と判る)漁船に、警告もなしに(国旗を掲揚していなかったとか、警告を無視したとか言っているが)突然発砲し漁船員を射殺するような暴挙は到底許される行為ではない。ロシア政府スポークスマンは、日本漁船の密漁と国境侵犯が事件を惹起させた原因だと、いつも通りロシア領海内で密漁をしていた日本漁船による越境行為と、それを黙認していた日本政府にすべての責任を被せ、ロシア側に非は一切ないとする一方的な公式見解を発表した。

「盗人に追い銭」と云ったらいだらうか、この近海の部分的な操業保障（本件拿捕漁船の領海操業保障ではないにしろ）として、日本政府はロシア政府に毎年巨額の「入漁料」まで支払っているのである。そのこと自体、国境周辺海域には日ロ両国の船舶、漁船が入り乱れる可能性があることを示唆している。こういうフアジーな海域の現状と環境を考えれば、普通の神経ではいきなりズドンとはいかないはずである。しかも、仮にも他国の無防備の民間人を問答無用で殺害した野蛮な犯罪行為に対して、謝罪はおろか、警備艇乗員の処罰、および被害者への賠償の必要もなしと強弁し、拉致した船員を拘束したまま、不誠意にもこれまでのところいつ日本に帰すとの誠意ある回答もまったくない。いつもながらのロシア政府のこわもてぶりと不誠実で非情な対応には、日本人ならずとも誰しも強い憤りと怒りを覚えるであろう。周辺諸国を惑わす一連のロシアの強引な手法と行動は、最近になって一層強権的な姿勢を国内外にあらわに示し始めた。いよいよプーチン政権が、その冷酷非情な本領を發揮し出したのである。

一方、これまで「ババ抜き」を嫌がり北方領土問題から腰が退け、放置してきた外交音痴の日本の政治家たちの無責任と不見識も、この際厳しく糾弾されるべきである。このような野蛮な事件が起きるといふことは、一ヶ月前ロシアのサンクト・ペテルブルグ（七月一五日〜一七日）で開催された先進八カ国首脳会議（サミット）の際、小泉・プーチン両首脳が個別に会談したにも拘わらず、日ロ両国の間ではいまだに戦後処理が終わっていないことを示している。戦後六〇年以上に亘って一人近い拿捕者を出し、最近一〇年間に限っても五〇隻以上の漁船が拿捕された実害がありながら、現実には日ロ間の外交交渉、とりわけ北方領土問題は進展せず、頓挫して放置されているのが実情である。近い将来に明るい展望も見出せず、領海（国境）紛争解決と今後の安全操業をどのように解決させていくのか、この道筋について日頃饒舌な政治家からは、一向に理念や外交哲学に基づいた建設的な意見が聞かれない。今後わが国は北方領土問題解決のために政治家だけを当てにせず、外交官、有識者、経済人、文化人、教育者、マス・メディア、根室市民等を交え、長期的な見地に立ってわが国のコンセンサスを煮詰めたうえで、真剣に国境周辺に関わる両国間のルールをきちんと取り決めなければ、永遠にこの種の事件は繰り返されるであろう。

いずれにしても現状打開は日ロ両政府の誠実な政治・外交交渉に委ねられなければならないが、度々指摘したように、他の民族とは異なる哲学、社会観、人生観と行動パターンを有する宇宙人・ロシア人を相手にしなければならぬだけに、その前途は容易ならざるものがある。多くの国民が本件と解決への道筋から目を逸らさずに、マス・メディアの報道と同時に、小心翼翼の政治家たちの言動にも注視して欲しい。

三、モラルのない盗難防止策

シベリア鉄道の旅の終わりに経験した不愉快で異常な印象を、改めてもうひとつ紹介して

おきたい。日本へ帰ろうとモスクワ・シエレメチエボ国際空港へ来た最後の土壇場で、ロシア国家のお家芸であるウルトラC級の最後っ屁をひっかけられたのである。

搭乗手続きをしようとした際、国営航空会社アエロフロートのスタッフから託送荷物（トランク）に盗難防止用の梱包は必要ないかと尋ねられたのである。意味が分からずポカ〜ンとしていた筆者に、係員は盗難防止用梱包の何たるかを説明してくれた。トランクをロックしただけで、そのまま機内託送荷物として預けるとロシア国内で中身を抜き取られる恐れがあるので、ロックしたトランクをビニールでぐるぐる巻いてトランクごとパウチするというものだった。つまり、荷物に接触することの出来る人間（航空会社係員、税関員、空港職員等とは断言しなかったが彼らを指していることは明白）が短い時間に鍵をこじ開け、中身を抜き取る災難から、未然に被害を防止しようというものである。空港関係者をまったく信用していない、付け焼刃の盗難防止策である。係員はパウチさえすれば短時間に空港内で抜き取られることは絶対ないと、胸をはって盗人猛々しいたわけたことまで言っている。航空会社手続きカウンターの前には、ちゃっかり制服を纏ったロシア政府公認の梱包業者まで待機していて、手際よくパウチしてくれる。ほとんどの外国人旅行者は係員のアドバイスに従ってパウチの手続きをしているようだった。しかし、これもタダというわけではなく、仮にも有料である。国の首都にある国際空港で頻発する抜き取り事件なんて、先進国ではあまり聞いたことがない。国家にとっては国のプライドと信用を傷つける、国辱的な破廉恥極まりない出来事である。常識的には国家の威信を賭け、すぐにでも犯人を見つけ出して抜き取り事故絶滅を期するのが、取り組むべき緊急の優先課題であるはずである。それにも拘わらず、この国ではそうは考えられていないようだ。その気になれば撲滅可能な抜き取り犯人探しより、国ぐるみで金儲けとヤクザ家業にうつつを抜かして泰然としているのである。上から下までみんな、堂々と「悪さ」をやっているのだ。恥も外聞もかなぐり捨てた、あきれたロシア的商法である。

かつて、インドネシアのジャカルタ空港で、出入国係官に出国通路の死角に誘き出され金を強請られたことはあったが、この大ロシアでは、貴重な外貨を落としてくれる外国人旅行者に対して、恩を仇で返すように旅行者の不安を煽りながら、合法的、かつ公然と国家ぐるみで強請とたかりを強行しているのである。搭乗客に過重な負担を押し付けるこの国家的防犯システムと、公務員の尊大な対応には、国家の名誉や尊厳とか、国家公務員としての規律やモラルの欠片も見られない。何とも破廉恥でお粗末なヤクザ的パフォーマンスには、もはや言うべき言葉もなかった。

車中六泊のシベリア鉄道の旅は、終始牧歌的な情景が目に入り、所々で微笑ましい人間的なハッピーニングもあって、乗車中は「これぞ旅の真髄」と思えるほど、「心を癒してくれる本物の旅」を心底エンジョイすることが出来た。しかし、それもロシアの一般市民と道中を旅しながら同じ目線で物事を見ているうちである。それが嫌でもロシア社会全体をロシア官製のリトマス試験紙で見るとなると、旅でもロシア社会の「檻」にはまり、異質な重しが被さって来ると、俄然ロシアの旅も窮屈なものになり、汎スラブ的プレッシャーに息が詰ま

る思いに囚われる。とにかく旅の途中でもしばしば展開される、ロシア的パフォーマンスには戸惑い、時には開いた口が塞がらず、最後の最後まで大国ロシアは掴みどころがなく、ロシア全体を考えると、どうしても心を平らにすることは出来なかった。

ロシア全体を一口で言えば、食材はよいのに腕の悪いコックが調理したロシア料理を食べさせられたという印象が、当たらずとも遠からず、ではないかと思う。

四、ロシアは責務を果たせ！ 相応の国連分担金負担を

ロシアという国はなかなか一筋縄ではいかない、常識的には話に筋道の通らない国であることは、これまで紹介した事例でおおよそ分っていただけだと思う。大多数の国民が生活苦に喘いでいようとも、国家の上級階層と一部の石油成金だけは潤い、国と庶民を食いものにしてお構いなしに自由気ままな生活を送り、その一方で庶民生活はますます困窮の度合いを深化させていく。他人(他国)のことは放っておいて、自分(自国)のことだけ考えればよいと思っているように感じられてならない。手前勝手なのである。それがロシア国内に留まりロシア人が苦しんでいるうちは、彼らに同情こそすれ、外の人間にとっては、まだ内政問題だと割り切って考えることも出来る。しかし、そのガス抜き余波がロシアの外へ向けられるとたまったものではない。

すでに前号でも述べたように、マス・メディアから目を離さないで国際社会を見ていると、必ず国際的な常識や、通念から考えて、よもやと思える荒業的パフォーマンスが時に展開されることがある。残念ながら、その主役と黒衣はいつも「大国ロシア」なのである。

一度にすべての難問を解決する手立ては難しいだろうが、ロシアという大国に関心を抱くひとりの人間として、差し当たってロシアに対して最小限要求したいことは、大国なら大国らしく、また国連において拒否権等の特別の権限を付与されている、五大常任理事国のひとつなら常任理事国らしく、都合の良い自己主張や、受益的な権利行使ばかりでなく、大国として当然世界中から期待され、背負わされる責務を果たして欲しいということである。

そのひとつが、国連予算全分担金のうち僅か一・一%(一九六〇万\$)しか拠出していない現在の国連分担金を、せめて五%程度(それでも少ないが)は負担して然るべきだと思う。瑣末なこととはかく、とりあえずロシアに対しては世界中がその剥き出しの利己主義とビッグマウスに翻弄され、そのパフォーマンスにあき果て、内心忸怩たる思いを抱いていることは明々白々である。これまで、日本(二億四六四〇万\$、分担率一九・四七%)もこの点についてロシアに強く物申すことはなかったように思う。いつもロシア流の強引なやり方に圧倒され押し切られているわが国としては、この際自国経済の好調を背景に、ことさら自らの特権的な権利のみを主張しようとするロシアに対して、日ロ両国の利害関係が絡む北方領土問題は切り離して、グローバルにはつきり物を言える立場にいるはずである。アメリカ(四億三九六〇万\$、分担率二二・〇〇%)やその他のEU国と連携して、駄々っ子ロシア

に対して、①国内景気好況、②国連常任理事国としての責務、③他国に比較して少なすぎる分担金、等をひとつひとつ精査して理のあるところを諭しながら説明し、国連五大常任理事国のひとつとして、責務を履行するよう迫るべきである。ロシアのあまりにも少ない国連分担金は、同じ少額分担金抛出の五大常任理事国のひとつ、中国（三六五〇万\$、分担率二・〇五%）に対しても少額の言い訳の材料を与えている。巨額な抛出国であるアメリカや日本は、ロシアには堂々増額を要求し、もつと国連の活動に対する理解を深めてもらい、貢献度を高めてもらうよう説得するべきである。それが日本のみならず、全国連加盟国にとっても広く恩恵をもたらすことになる。

ロシアよ！ 一日も早く一人前の大人になって国際的責務を果たし、国際社会を惑わさず、世界から信頼される国になって欲しい、というのが、ささやかな願いである。

〔北方海域における日本漁船拿捕直後の八月一九日記〕